



大型類人猿保全計画（グラスブ）の概略

大型類人猿保全計画（グラスブ）の発足

大型類人猿保全計画（グラスブ：Great Apes Survival Project）は国連環境計画エグゼクティブダイレクター、クラウス・トプファー博士の提唱で 2001 年に立ち上げられました。大型類人猿は人類に最も近い生物として知られ、96,4%から 99,4%もの遺伝子を我々人類と共有します。チンパンジーとボノボの 99,4%という、驚異的な遺伝的近似性を始め、ゴリラの 97,7%、オランウータンの 96,4%も、生物界で他に類を見ません。大型類人猿の生息する生態系の重要性は、生物種の多様性に富んでいるという観点からだけではなく、京都会議で採択された二酸化炭素削減のための森林保全という人類の最重要課題にも起因します。学習能力、社会性などの研究成果からも、人類にとっての重要性が明らかになっています。しかしその反面、最新の研究成果に基づくデータによると、有効な保全活動がなされなければ、全大型類人猿の絶滅は 40 年以内と推測されています。

大型類人猿保全計画（グラスブ）の組織の枠組み

組織の枠組みとして斬新で且つ世界的に注目を浴びている点は国連機関、他国際機関、加盟国政府、民間企業、NGO、個人が協力して成功を導いていこうという取り組みが可能になったことです。2002 年、南アフリカ共和国ヨハネスブルグの「持続可能な開発をテーマとした世界サミット」を契機にグラスブは、国連環境計画とユネスコ（国際連合教育科学文化機関）、大型類人猿の生息するアジア、アフリカ 23 ヶ国の政府、支援国政府、国際条約担当諸機関、及び NGO を含んだ包括的な国際保護計画として運営されてゆくこととなりました。

支援国としては、当初から継続的に支援を続けてきたイギリス政府に加え、ベルギー、アイルランド、デンマーク、ドイツ、ノルウェー政府、そして 2005 年はヨーロッパ連合も支援に乗り出しました。近年、日本政府、中国政府、アメリカ政府等の参加が期待されています。

日本においては 2003 年始め、GRASP・Japan（大型類人猿保全計画日本委員会）が、京都大学名誉教授であり、国連大型類人猿保全計画親善大使でもある、西田利貞氏を代表に大型類人猿の保全を目的に結成されました。各界において、多くの団体、個人が関心を寄せるようになり、支援に乗り出し始めました。このような流れの中で、愛知万博国連館において国連と GRASP・Japan 共催の展示場とイベントが実現するに至ったのです。

渋井直人